

第2回 じみ研ニュースレター

2012年9月

一般社団法人 地域の魅力研究所

多胡 秀人 info@jimiken.org

ー キーワードはリーダーの本気度！ ー

島根県隠岐島の海士町(あまちょう)の玄関口、菱浦港に着くと、ポスターが目に入ります。「ないものはない」

無い物ねだりはやめて、島にある良いものをみつけようというメッセージで、この島の生き方を宣言しています。

海士町は10年余り前は財政破たん直前でした。それが山内道雄町長と役場の職員の給与カットによる支出削減と「総合サービス商社」としての収入アップにより、最悪期100億円だった借金的大幅削減に成功しています。総合サービス商社の担い手は役場職員、地域事業者、そしてIターンの若者たちです。現在、海士町に人口2300人のうち300人はIターン族。

CASという素材の細胞を壊さない冷凍技術を導入し、海産物の鮮度を保ち、在庫を持てる仕組みを作り、さらには商品開発や首都圏などへのマーケティングを展開しました。CASを導入した自治体は他にもありますし、海産物で地域活性化を目指す地域は数多ありますが、海士町が卓越している理由は、「本気度。体を張ってやる。」ということ。

実を言いますと4年前に山内町長に、ある離島で講演をお願いしたことがあります。大変ご多用な中、離島からのリクエストならばと御快諾をいただきました。大変な人気で町のホールは満席となり、立ち見のお客さんも多数出ました。その前月に知事が来た時には半分も埋まらず閑古鳥状態だったのと対比的でした。

8月に海士町を訪問したのですが、遅まきながらその折の御礼とその後の当該離島の現状報告もありました。同島は残念ながら、海士町のように変身を遂げることができていません。

海士町のメディア露出度が高まるにつれ、視察の類いも多いようですが、おそらくほとんどの視察者たちは現象面を真似するだけで、結果が出ないと諦めるか、海士町は特別だなどと講釈を並べて、熱が冷めているに違いありません。

役場の職員が本気でやれば、それを見ている地域住民は間違いなく変わる。いまや、海士町の住民は役場に何かをやってくれとは言わないそうです。

(多胡秀人のブログより抜粋)